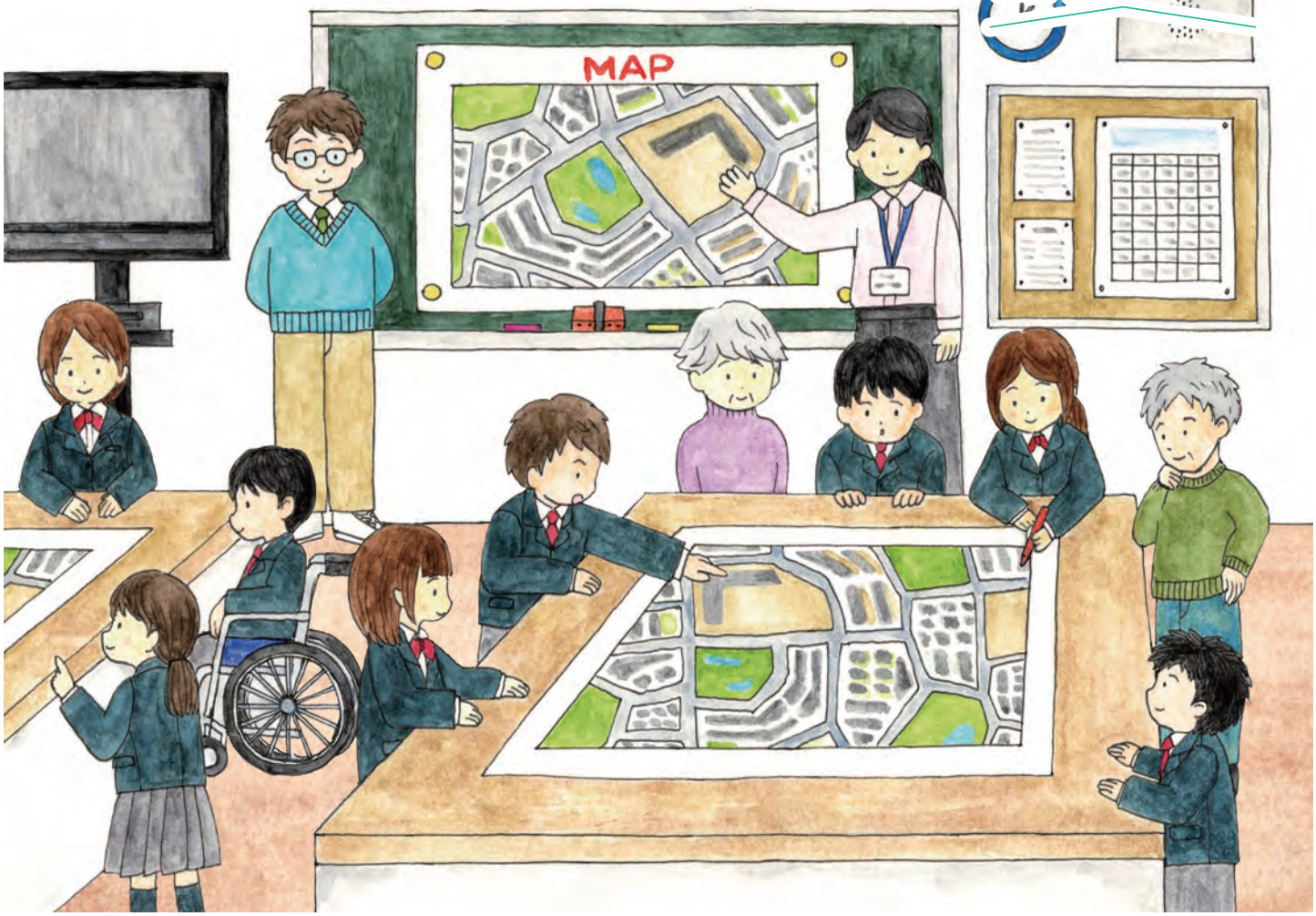
2026年11月20日発行　奇数月発行　通巻404号

ボランティアの魅力発見誌

ネットワーク

2026年
11月号 No.404



特集

学校と地域と一緒につくろう
～福祉教育・ボランティア学習・市民学習

01 — やってみたい！ 障害者施設で〝ともに過ごす〟ボランティア
12 — 居場所ミニレポ 子ども若者ルーム　タルトタタン
13 — セルフヘルプという力 神奈川過労死等を考える家族の会
18 — いいものみぃ～つけた！ ワークショップ石神井のリース・ハーバリウム

東京ボランティア・市民活動センター

やってみたい！

やったことないボランティア

Vol.4

中学生 体験レポート

みなさんは、障害者施設に行ったことはありますか？「かかわりがないと気軽には行けないのでは？」と思う人もいるかもしれません。今号では、障害者施設でのボランティア活動をご紹介します。

障害者施設で〝ともに過ごす〟ボランティア

今回、編集部で「夏の体験ボランティア」プログラムの一つとして「情報誌『ネットワーク』ボランティアレポーター募集！」を企画しました。

プログラムに応募した4名は、たまたま全員中学2年生。この4名が、障害者支援施設リアン文京でボランティア活動に参加し、レポーターとして本誌の取材をお手伝いしてくれました。その様子をご紹介します。

リアン文京って？

まずは、施設長の野村美奈さんとリーダーの梶田耕平さんにリアン文京について説明していただきました。

リアン文京は、知的・身体などの障がいのある人のほか、子育て中の人、高齢の人、地域で暮らす人のための総合的な福祉施設[*1]です。「リアン」はフランス語で絆（きずな）という意味。『人と人、地域をつなげる「絆」となる』をミッションに活動しています。

障害者施設ってどんなところ？

ここには、「施設入所」といって、リアン文京で暮らしている人もいれば、仕事をしている人もいるそうです。今回、参加したのは、入所している人と、地域に暮らしていて家から通っている人が過ごす「こぱん」の活動。「こぱん」では、運動・創作・趣味活動などを通して、生きがいづくりや自立支援[*2]のプログラムを行っています。

「利用者[*3]さんに挨拶をしても返ってこないことがあるかもしれません。言葉でのコミュニケーションが難しくても、職員たちは柔らかい表情で接したり、一緒に手をたたいたりして、良い雰囲気になるように心がけています」と梶田さん。

活動開始！

施設内を見学して、いよいよ、活動開始。カラオケ・ボッチャ・太鼓・カップインボールのグループに分かれて活動が始まります。

＊1　運営は社会福祉法人武蔵野会。　＊2　障がいのある人や高齢の人などが、その人らしい生活ができるようにサポートすること。
＊3　施設の入所者や通所者。

こんなことをやりました！

13:00 集　合



施設についての説明を受けます。



施設内を案内していただきました。

13:30 活動の時間

カラオケ



利用者さんがそれぞれ曲を選び、
手拍子で盛り上げ！

ボッチャ



準備体操をしたあと、
利用者さんとボッチャに参加。

太　鼓



音楽にあわせて自由にたたきます。
熱気があふれていました！

カップインボール



紙コップにボールを投げ入れ、裏に書いてある点数を足して競い合います。手を動かしづらい方は、手作りの補助具でサポート。

14:30 フリータイム

かるたやバドミントンをしたり、
並んでテレビを観たり…
利用者さんと一緒に過ごしました。





15:30 終　礼

ボランティア活動終了

17:00 活動終了

ボランティアレポーターの
みなさん、
おつかれさまでした！



職員の梶田さんにインタビューし、
レポートを書きます。



梶田さんにボランティアレポーターのみなさんから質問！

Q 利用者さんとかかわる難しさはありますか？

A たとえば、利用者さん同士がお互いの意見を主張するとき、職員が2名いればそれぞれの立場に立って話せます。が、1人のときには双方の気持ちを聞き、それを相手に伝えるというやりとりを単独でします。そんなときに大変さを感じますね。

Q 梶田さんが大切にしていることはなんですか？

A 表情です。利用者さんは職員の表情を見ています。良いときは連鎖して、安心するんです。これまでのかかわりをもとに、こちらも利用者さんの表情から気持ちを推測したり、利用者さんにとってもっとも良いことは何かを考えるようにしています。

Q 働いていて、良かったことはありますか？

A たくさんあります。とはいえ、職員も人間なので、泣いていたり、騒いで走ったりしている利用者さんがいると、焦って余裕がなくなることもあります。そんなときには表情に出さないよう、試行錯誤していくうちに自分自身のメンタルの保ち方も変わってきました。

Q 落ち着かない利用者さんとはどうかかわっていますか？

A にぎやかな場所が苦手な人がいたり、待つのが苦手な人もいたり一人ひとりかかわり方は変わります。落ち着かないときは、いったんその場を離れてリラックスするのを待つこともあるし、普段その人が聴いている曲を鼻歌で歌ったら、落ち着いたということもありました。



私は初めて施設でのボランティアに参加しました。そのうえ、障害者の方と接するのも初めてでした。始まる前はちゃんとコミュニケーションが取れるか心配でした。しかし始まると気づけば活動前のような心配は消えていました。フリータイムにかるたをしたときは障害者の方とより多くのコミュニケーションをとることができ、さらに緊張がほぐれて障がい者の方とのコミュニケーションを楽しむことができました。このような普段体験できないようなことを楽しみながらできることがボランティアの良いところだと思いました。　平山楓（かえで）



障がい者施設にいる方も僕たちと同じということを感じた。生活にサポートが必要なだけ。僕たちも誰かにカバーしてもらっている。それと同じなんだと感じた。

僕は知的障がい者の方たちが休みの時間、太鼓をたたいているところに参加させてもらった。その中には音楽に合わせて太鼓をたたいている人もいれば、自分のリズムでたたく人、踊っている人もいた。コミュニケーションをとるのは難しいにしろ、行動や表情で楽しさを共有できる。そのことを皆さんに知ってもらえたら嬉しいです。　小森篤



私がこのボランティアで学んだことは、「人と人のあたたかみ」です。施設で働く方がたくさん盛り上げて、利用者さんも楽しく参加できる空気を創り出していたことに憧れを覚えました。私にもなにかこの場をより楽しく和やかなものにできることはないか？と考えるようになれました。そしてがんばれ！や拍手など行動することも。

最後に、私はこれから少しでも誰かの力になれるように、施設の方々を見習い、笑顔を忘れず生きていきたい！　岩垂（いわだれ）りんご

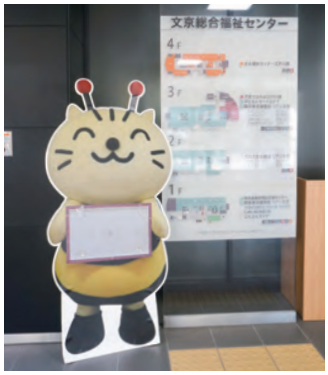


中学２年生で、初めて障害者施設でボランティア活動に参加しました。障害のある人とかかわるのは初めてだったのでずっと緊張していましたが、カラオケやバドミントンをして、緊張もほぐれていって、一緒に歌ったり、笑ったりして楽しむことができて施設の方々とも仲良くなれてとてもうれしかったです。普段かかわらないような人たちと積極的にかかわるなかで、私も自分から手をたたいてみんなと盛り上がる面白さを知りました。最初はどうかかわればいいのか不安でしたが、最後にはとても楽しく終わることができました。　常國莉子（つねくにりこ）

編集部より

レポーターのみなさんのお話を聞くと、最初は言葉でのコミュニケーションが難しいなかで戸惑いを感じていたようですが、同じ時間を一緒に過ごすうちに、だんだんと笑顔が増えていき、ほっこりした時間が流れていました。〝ボランティア〟というと、「何かしなきゃ」と気負いがちになるかもしれませんが、「こぱん」の活動は「ともに過ごす」ことを大切にしているのだなと思いました。

遊びに興じる利用者さんもいれば、その様子を少し離れたところから見てほほ笑んでいたり、うたた寝している利用者さんなどもいて、自由にのびのびと過ごしている姿が印象的でした。



リアン文京のイメージ
キャラクター ぶんにゃん。

団体DATA



リアン文京がある文京総合福祉センターの外観。

団体名 社会福祉法人武蔵野会 障害者支援施設リアン文京

団体概要 文京総合福祉センター内にある、社会福祉法人武蔵野会が運営する障害者支援施設。「絆社会の実現」をミッションに掲げ、障害のある人もない人も、子どもからシニアまで全世代が交流できる場づくりを進めています。

ホームページ
https://team-lien.com/

連絡先
電話：03-5940-2822　メール：info@team-lien.com
住所：〒112-0006 東京都文京区小日向２丁目-16-15

ボランティアさんにお願いしたい内容
「こぱん」のほか、カフェや食堂、イベントのお手伝いなど、さまざま。

こんな方に向いています
・一緒に活動や体験を分かち合いたい方
・福祉や地域交流に関心のある方
・居場所づくりに興味のある方

ワンポイントチェック

- ☑「１日だけ参加」も可
- ☑ 土日参加可　☑ １時間～可
- ☑ 午後６時以降可
- ☑ 自宅でできる
- ☑ 初心者歓迎　☑ 中高生歓迎
- ☑ 親子歓迎　☑ 見学・体験歓迎
- ☑ 大人数（10～20人）のグループで参加できる（イベント開催時）

興味のある方にひとこと

事前のオリエンテーションや研修があるので、初めての方も安心して参加できます。まずは見学だけでも大丈夫なので、気軽にいらしてください。

こんな団体でも募集しています。 障害者施設でのボランティア

NPO法人テイクオフ
障がいを持つ小中高生の放課後と土日の余暇活動、18歳以上の青年・成人期余暇活動
〈立川市〉

NPO法人風の子会
障がいのある子どもと遊んだり、生活支援をする
〈葛飾区〉

NPO法人ぱれっと
余暇プログラムに参加して一緒に楽しみ、活動を盛り上げる
〈渋谷区〉

※余暇活動のほかにも、外出の付き添い、傾聴、イベントの手伝いなど、障がい児・者の方々と過ごす活動があります。お近くのボランティアセンターなどで情報を探してみてください。

特集

学校と地域と一緒につくろう
～福祉教育・ボランティア学習・市民学習

《福祉教育・ボランティア学習って？》 福祉教育・ボランティア学習とは、学校教育を中心に、福祉への理解やボランティアへの理解を育み、体験活動を通して共生社会の実現に必要な知識・態度・実践力を養う教育・学習です。福祉教育の歴史は古く、1970年代頃から学校で実施されていたといわれています。

《市民学習ってなんだろう？》 市民学習は一人の市民として社会に参加し、地域や社会の課題解決に主体的に取り組む力を育てる学習です。多様な人々と協力しながら社会問題を解決し、誰もが安心して安全に暮らせる社会を構想し、創造できる人（市民）へと成長を促す学習で、学校の授業だけに限りません。ESD（持続可能な開発のための教育）や、シティズンシップ教育、主権者教育など広く関連付けることができます。

どちらも、**社会のことを学び、自分で考え、地域や社会のために行動できる人を育てる学習です。**

今回は、先生、ゲストティーチャー、協力するボランティアセンター、それぞれの視点からお話を聞いてみました。読む方の世代によって、違った見え方があるかもしれません。

～先生編～
小学校のなかで福祉教育に取り組む

日野市立滝合（たきあい）小学校では、地域や日野市社会福祉協議会と連携しながら福祉教育に取り組んでいます。清水勇輝先生にお話をうかがいました。

■自分たちが社会を変えうる存在だと伝えたい

――福祉教育はどんな授業なのですか。

滝合小学校では4年生の「総合的な学習の時間」の中で行っています。教科書はなく何年生で何をするかは、学校で話し合って決めています。学習指導要領[*1]に「主体的・対話的で深い学び」の視点という要素があり、総合的な学習の時間でも「探究的な学び」をめざしています。

――福祉教育で伝えたいことは？

福祉と聞くと、困っている人を助けるというイメージをしがちですが、そうした一方的なものではなく「誰もが自分らしく安心して幸せに暮らせる社会」をつくる、そのために必要な学習だととらえています。

授業では、目の前の人や社会に関心をもち、自分にできることを考えて一歩を踏み出すきっかけとなることをめざして取り組んでいます。教室のなかで知識を学ぶだけでは到達できません。地域を歩いて、人と出会い、何かを知ること、そして自分のあたりまえが、みんなのあたりまえではないことに気づいてほしいと考えています。「あの人は大変だ。かわいそう」という感想で終わらせず、社会に必要な工夫や、自分にできることを考える力をつけてほしいと思っています。

――印象に残っている授業はありますか。

「滝合ハートフルプロジェクト」です。障がい・パラスポーツ、交通安全など、





（左）作成した交通安全の横断幕。
（上）福祉教育の授業の様子。

複数のテーマをひとつにつないだものです。東京デフリンピック*2の時期でもあったので、日野市出身の名村昌矩（なむらまさのり）選手（デフサッカー）と交流しました。聴覚障がいがある名村選手に対して児童たちが自分の伝えたいことや聞きたいことを考えて、手話を学んだり、手話以外の伝達方法を考えていました。この経験から、伝えたいことをきちんと伝えるために工夫することの大切さに気づいたようです。名村選手がひとりのアスリートとして努力している姿や挑戦し続ける生きかたに触れられたのも、印象的でした。

交通安全については、道路を歩いて危険や段差を見つけ、標語やイラストを考えて、横断幕をまちなかに掲示しました。自分たちが見つけた課題などを発信し、横断幕を見た地域の人から声をかけてもらえることも増えました。こうした経験を通して、子どもたちには自分が社会を変えうる存在であることを自覚してもらえたらと思っています。

――授業内容はどのように考えているのですか。

福祉教育の授業には、福祉の専門性と児童の発達段階に応じた学習計画が必要です。日野市社会福祉協議会の協力のもと、たくさんのゲストティーチャーとつながりました。事前の打ち合わせや調整には時間がかかりますが、多様な方々と一緒に考えることで、より学びが深まると考えています。

■だれもが暮らしやすい社会をつくるために

――児童たちに変化はありましたか。

今年度、私は5年生の担任をしています。その児童たちが友だち同士でもめたときに、昨年受けた福祉教育で話し合ったことを振り返っていたり、まちなかで耳が聞こえない人を誘導したという児童がいたりと、気づきの質が上がったように思います。日常の積み重ねのなかで言葉づかいや行動に、小さいけれど確実な変化を感じています。先生に言われたからやるのではなく、自分たちの行動に意味があると感じて動くきっかけになったのかなと感じます。

――福祉教育は学校内での授業にとどまらないのですね。

大人にとっても福祉教育には学びがあって、私自身も身の回りの課題により早く気づき、行動するようになったと感じています。

学校は学びのきっかけであり、関心をもった児童がいたとき、地域で実践できる場が増えることを願っています。児童たちが実践することでさまざまな人につながり、学校と地域の人たちが一緒に、だれもが暮らしやすい社会について考え、それをつくっていけたらなと思います。

＊1　文部科学省が定める日本の学校で、何をどのように教えるかを定めた全国共通の基準。10ページ参照。

＊2　聞こえない、聞こえづらいアスリートを対象とする、国際的な総合スポーツ大会。2025年に東京で開催された。



体験して学ぶ「見え方は千差万別」。

～ゲストティーチャー編～

ブレイリーズ（Braillies）
代表 小汲唯奈（おぐみゆいな）

福祉教育にゲストティーチャーとして登壇し、その後の市民学習につながるサイクルを編み出している、「ブレイリーズ」の活動について小汲唯奈（おぐみゆいな）さんにお話をうかがいました。

■悔しさや憤りをきっかけに

ブレイリーズは、「視覚障がいの有無に関わらず、自分の意志で一歩を踏み出せる社会にしたい」というモットーの下、視覚障がい者と晴眼者（せいがんしゃ）*1の架け橋になろう、という思いから始まりました。晴眼者が持つ偏見をなくし、個人が有する力を最大限に発揮できる社会を目指しています。

まず自分の話をすると、私には網膜色素変性症という疾患があります。もともと人より見えづらかったのですが、中学生までは一般の学校に通っていました。ところが、徐々に視野が狭くなり、高校は盲学校に進学しました。盲学校では、白杖歩行や点字、音声読み上げソフトの使い方など生活スキルを学ぶことができましたが、同時に閉鎖的な世界だと痛感しました。進路として提示されるのは、障がい者雇用枠での就職か、按摩（あんま）・鍼（はり）の資格取得のどちらか。見えなくなるとこんなにも世界が狭まってしまうのか、という悔しさや憤りがありました。この状況を生み出してるのは社会の偏見や無知であり、視覚障がいがある人が、前例のないことに挑戦するときのハードルになっていると思いました。そこで、自分がロールモデル*2になって、視覚障がいがある人の選択肢を広げたいという思いもありました。

■見えにくさを体験するロービジョンカフェ

ブレイリーズには、発信する活動と対面で行う活動があります。前者は、ロービジョン*3である私の勉強方法や点字のレッスン動画をSNSで紹介したり、活動レポートや留学や教育実習の経験などをnoteに掲載しています。



（右ページ）中学校でのワークショップ。
点字・白杖体験、ディスカッションなどを行う。
中央が小汲唯奈さん。
（左）ロービジョンカフェ。調理や食事など
見えにくい状態で日常の体験をしてみる。

対面の活動としては、学校や学会などで講演やワークショップを行っています。看板企画は、日常の一コマで見えにくさを体験する「ロービジョンカフェ」。

ロービジョンカフェとは、見えにくいメガネを装着して、日常生活のシミュレーションをする催しです。視覚障がいといっても見え方は千差万別。さまざまな見えにくさの中で、どんなところに日常とのギャップが生まれるのか、そんな気付きを体験していただいています。

このカフェは、自分が小学生のときに受けた福祉教育の経験が基盤になっています。視覚障がい体験では、アイマスクをつけ全く見えない状況をつくっていました。私は光覚[*4]はあり暗闇状態ではありませんが、視覚障がい＝全盲という先入観が強く、「ほんの少し見えるけど見えにくい」というもどかしさは理解を得にくいと感じています。この状況はアイマスク体験も一因になっているのではないか、そんなふうに思い、企画を考えました。この活動をとおして、視覚障がいやロービジョンについて正しく知っていただけたらと思っています。

■体験での気づきから次のステップへのサイクルを

福祉教育でゲストティーチャーをするとき、「いい話だった」「おもしろい体験だったな」で終わらないよう、見えづらさから何を感じたか、それに対して見える人は何ができるか、共に生きるとはどういうことかといったことを議論してもらいます。そして、それを生活のさまざまな場面に具体的に落とし込むことで、気づきを深めていただくことをねらいとしています。

他に、生徒が興味を示したら、その話題を深掘りしたり、質疑応答などで生徒と話す時間をもうけたりもしています。後日、先生から「生徒がこんな活動を始めた」といった報告を受けることもあり、一歩を踏み出すきっかけがつくれたのかなと、とてもうれしく感じます。

高校生・大学生や大人の場合は、ロービジョンカフェの体験後に、ボランティア側の立場で参加していただくこともあります。こうしたサイクルをつくることで、気づきから次のアクションへとつなぐことができたら…と考えています。

＊1　視覚に障がいのない人。メガネやコンタクトレンズの使用により日常生活に支障がない人も含む。
＊2　考え方や言動、生き方などが他の人にとって手本や規範となる人のこと。
＊3　眼鏡やコンタクトレンズを使用しても、手術などの治療を行っても、見る働きが十分に改善せず、日常生活に支障がある状態。
＊4　光の有無を識別できる視力。

小汲唯奈（おぐみ・ゆいな）
高校時代に「ブレイリーず」を設立。団体名の由来はBraille（＝点字）。現在は大学生で視覚障がいの当事者として活動するかたわら、日本語教育や多文化共生の推進など多方面の活動に取り組んでいる。
note
instagram

～地域の人びと編～

〔体験取材〕『ふくし体験プログラムサポートボランティア講座』

社会福祉協議会やボランティアセンターなどでは、学校からの依頼を受けて、ゲストティーチャーを紹介したり、講師になったり、授業のサポートをしています。

ボランティア活動センターこくぶんじでは、積極的に学校に働きかけ、授業に協力しています。地域で暮らす人にも福祉教育を知ってもらい、一緒に協力してもらえるきっかけづくりにつながる「ふくし体験プログラムサポートボランティア講座」を取材しました。

この講座では、ふくし体験プログラムのねらいを聞いたり、実際に市内の小中学校の福祉教育で講師を務める当事者の方やボランティアグループの方のお話を聞くことができます。実際に体験する時間もあり、児童生徒がプログラムで行うことを事前に経験することで、当日のイメージがつかめてサポートもしやすくなります。

今回の講師は、頸髄（けいずい）損傷により6～7年前から車いすを使うようになった方。現在もお仕事をしながら市内にお住まいで、雨の日に傘が差せなかったり、自販機に手が届かないので指し棒をもっているなど普段の暮らしの様子や、小学生にもすぐにできるのは場所を譲ったり道をあけることなど、当事者目線のお話をしてくださいました。

その後、講座の参加者がペアになり、車いすに乗る、押す、をそれぞれ体験します。車いすのブレーキの位置や、実際に乗ってみた目線など、気づくこともたくさんあったようです。

■参加者の声

🙂定年退職後に時間ができ、地域で何かやりたいと思っていました。市報と一緒に送られてくる社協だよりやインターネットをみて、講座を知って申し込みました。自分が子どもの頃はこういった福祉教育はなかった。今後の社会を担う子どもたちの学びをお手伝いしたいと思います。

🙂子どもが小学校で点字の授業を受けてきたところ、点字に興味を持ち、点字器がほしいと言いました。今も実際に点字を打って練習しています。それをきっかけに、自分も以前別の地域に住んでいるときに福祉教育のボランティアをしていたのを思い出して、何かできればと思い参加しました。

当事者でも先生でもない地域の住民だからこそ、児童生徒と一緒に学びながら寄り添える存在になれるのではないでしょうか。こういった取り組みが広がっていくと、学校と地域が一緒によりよい社会をめざしていけるのではないかと思います。



※国分寺市社会福祉協議会 ボランティア活動センターこくぶんじ では、「ふくし体験プログラムサポートボランティア講座」を実施しています。ボランティアセンター職員や、ボランティアグループが学校で行う点字や手話、車いす等の高齢者・障害者理解や、防災、多文化共生などさまざまなふくし体験プログラムを、地域の皆さんと一緒に支えるため、講座を実施しています。

写真＝当日の車いす体験の様子。受講生が車いすでの移動を体験している。（2026年9月）

■編集部から伝えたいこと。

学校の先生が福祉について詳しいとは限りません。だからこそ、ボランティアセンターや社会福祉協議会を通じて、当事者団体、地域住民など、多様な立場の人が授業に加わることで、児童生徒の学びが広がります。そして、そこにかかわることは、実は大人にとっても学びや気づきが多いものです。同じ地域に暮らす住民同士、誰もが暮らしやすい場所にしていくには、児童生徒だけが授業で学ぶのではなく、大人も一緒に考えていく必要があるのではないでしょうか。

■「学習指導要領」とこれからの学校教育

清水先生のお話にも出てきた「学習指導要領」。小学校の場合、2028（令和10）年から新しい学習指導要領が先行実施される予定で、この記事を書いている2026年10月現在、策定に向けた審議まとめがまさに行われているところです。

審議まとめ案を見てみると、少子化・高齢化、グローバル情勢の分断・対立、自然災害の激甚化、デジタル技術やAIの普及等といった社会の変化を予想しつつ、①「主体的・対話的で深い学び」の実装 ②多様性の包摂 ③実現可能性の確保 という基本的考え方が示されています。これからの時代を生きる児童・生徒にとっては、デジタル学習の活用も重要ではありますが、デジタル一辺倒に陥ることは避けるべきであり、「デジタルの力も使ってリアルな学びを支える」との考えに立つ必要があるとされています。

このような流れにおいて福祉教育・市民学習は、工夫次第で授業への協力ができるのではないかと思います。

■学校と地域と一緒につくるヒントは？

東京ボランティア・市民活動センターでは、リーフレット「学校と地域と一緒につくろう福祉教育・ボランティア学習」（2026年4月、画像参照）を作成しました。ボランティアセンターや社会福祉協議会、NPO等の方が学校の先生とお話する際のヒントになればと思い、現役の先生も一緒に作りました。活動例も複数載せているので、自分にどんなことができるか探している児童生徒のみなさんにもヒントがあるかもしれません。



■体験後に興味・関心の広がりへ

福祉教育で学んだり、興味をもった後に、その後も続けていける場があることが大事だと考えます。東海大学文理融合学部の山田一隆（かずたか）氏をはじめとした大学教員による研究の中で、ボランティアサークルに継続して参加した高校3年生の生徒にヒアリングしています。「日頃はスマートフォンによる調べ物だけで済ませているが、ボランティア活動や他校の生徒との交流を通して、新しい発見、情報、知識を得ることにつながった」「世界が広がり、人生を変えるような進学選択を行う契機をもたらした」。また、他校の生徒や大人との交流により、「自校の流儀」が通用しない葛藤を乗り越え、考えや視野が広がったことについても触れられています。

■子どもも大人も社会を担う「市民」。市民学習は大人も対象。

市民学習では、児童生徒と関わる大人もまた学習者であると考えます。「困っている人を助ける」「してあげる」のではなく、「誰もが安心して安全に暮らせる社会」をめざす。そのために、大人も「知る・体験する・考える」体験をしながら、児童生徒から学ぶ。学校だけでなく、地域にもそんな場をつくっていく。私たちみんなで、私たちの未来をつくっていきませんか。

◆参考資料◆

・文部科学省教育課程部会 教育課程企画特別部会（QRコード左）
・「日本におけるサービス・ラーニングの展開（34）―インタースクール型ボランティアサークルにおける学びと成長の考察―」2025, 山田一隆ほか / 日本福祉教育・ボランティア学習学会 第31回えひめ大会 ポスター報告
・学校と地域と一緒につくろう 福祉教育・ボランティア学習（東京ボランティア・市民活動センター / QRコード右）



被災地からのメッセージ

その3

能登の震災を自分事に
～自分の地域を知ることから～



総持寺通り協同組合
コミュニティマネージャー
宮下 杏里
（石川県）

「能登や各地の災害を自分事として捉え、自分の地域での防災意識につなげて欲しい」。これが今みなさんに一番伝えたいことです。

意識を持つといっても具体的に分かりにくいですよね。はじまりは小さいことでも構いません。例えば、「通勤や通学の途中、駅や電車内で被災したらどうしよう」とかイメージするだけでOK。最近は、移動中にイヤホンをしてスマホを見ている人が多い。また、スマホがないとどこに何があるか分からないという方も。被災したらスマホは一切使えません。あらかじめ、近くの避難所はどこかとかハザードマップを見て、「自分の地域」を知っておく。それが、防災意識につながっていきます。そうやって地域を知ることって楽しいですよ！

毎年各地で災害が起きています。今だからこそ、天災について学んだり、備蓄を考えたり出来るチャンスだと思います。これからもみなさんには能登に関心を持ってほしいし、能登に来てほしい。「自分の防災」を考えるきっかけとなれるように、私たちも今後の災害に対しての備えを強化していきます。

@MONZEN_KUSHIHI_ANRI



ボランティア・インタビュー Vol.3

小さな一歩で広がるつながり

本となかよくなるじかん　松本 玲子 さん

私は中野区江古田地域の「本となかよくなるじかん」で、子どもたちと本をつなぐ活動をしています。元保護者を中心に2016年に立ち上げた、学校支援ボランティアでの図書室のお手伝いがはじまりです。コロナ禍の時に子どもたちが本の紹介をする「読書ゆうびん」をスタート。少しずつ地域の図書館等とのつながりもでき、2024年からは小学校の図書室での「放課後こども教室」へと展開しました。読み聞かせだけでなく、紙の本に触れる機会をつくることで、子どもの自由な発想や豊かな創造性を伸ばす種まきをしている感覚です。



「放課後こども教室」の様子。
新たな本との出会いのきっかけにもなっている。

目立つ活動ではありませんが、本が好き、子どもの成長が楽しいという仲間が集まり、裏方から学校や地域を支えています。子どもの方から「次はこんなことしたい！」などと声が挙がると、とても嬉しいですね。

ボランティアには特別な特技も技術もいりません。役割もメンバーも心地よくゆるくつながれるのが魅力です。そんな活動はたくさんあるはず。まずは気軽に行ってみて！と言いたいです。

地域の居場所ミニレポ
ふらっと寄ってほっとして
＊その1＊

子ども若者ルーム タルトタタン

狛江市



ふらっとなんぶの階段室。
子どもたちのやりたいことが貼りだされている。

暑さの残る9月、子ども若者向けの居場所づくりを行うタルトタタンを訪ねました。閑静な住宅地に建つ2階建ての家を活用した、「多世代・多機能型交流拠点 ふらっとなんぶ」*。ここが子ども若者ルームの開催場所です。毎週水曜の午後、学校から帰った子どもたちがやって来て、備品のカードゲームやボードゲームで遊んだり、モニターを活用して動画を視聴したり、まるでみんなで誰かの家に集まったかのように、気がねなく好きなことをして過ごせるのが、この居場所の特徴です。

タルトタタンの活動のきっかけは、前代表の発案でした。コロナ禍の2021年、前代表が自身の学生時代に地元の地域の居場所を活用し、励まされた経験から高校生のための居場所をつくりたいと、狛江市社会福祉協議会（以下、社協）に相談をしました。前代表は社協の後押しを受け、市民活動団体「タルトタタン」を設立。ほどなくして高校生のための居場所の活動をスタートさせました。しばらくして、前代表が一身上の都合により活動を続けることが難しくなり、心理学の有資格者として活動のサポートを行っていた、現代表の田頭知茉（たがしらかずま）さんが活動を引き継いで今に至っています。

「あれをやろう、これをやろうよと、わたしから働きかけることはしません」と田頭さんは話します。子どもたちが自分のしたいことをする、それを第一に考えて居場所を運営しています。

たとえば、カードゲームやボードゲームの人数合わせが必要な場合など、子どもたちの求めに応じて一緒に遊びながら、子どもたちの思いにアンテナを張っているそうです。

ときには子どもたちの意見や提案をもとにイベントを企画、開催しています。これまでに「バレンタインに手作りのお菓子を渡したい」という相談からクッキー教室を開催。

子どもたちが主役となり、仲間と相談、助け合いながら、難しいと思っていたことも、みんなで力を合わせることで「できた！」という喜びに変わりました。

また子どもたちだけではなく、支援者や保護者の相談からデジタルイラストに興味のある子どもたちに向けて、専門の講師を招いたデジタルイラスト教室を開催。子どもたちの興味や可能性が広がる機会となりました。「自分もできる！」、「仲間と一緒ならできる！」そんな成功体験が、子どもたちの自信や次への一歩につながっていきます。

子ども若者ルームは、社協とも連携しながら、子どもたち一人ひとりの声に耳を傾け、その個性や得意なこと、興味・関心を見つめ、それぞれの可能性を発揮できるよう応援しています。地域の人たちともつながり、子どもたちが出会い、交流し、新しいことに挑戦できる機会を広げています。

詳細はボラ市民ウェブ（東京ボランティア・市民活動センター公式）にて近日公開予定です。

＊ふらっとなんぶは乳幼児親子から高齢の方までどなたでも利用することができ、困りごとの相談もできる地域の居場所。狛江市社会福祉協議会、狛江福祉会、子育ての輪の3団体が運営しています。

◆タルトタタン◆

小学生から20代までの若者を対象とした居場所づくりを行う。本記事のほかに、ご家族に不登校・ひきこもり状態の方がいる当事者家族を対象とした、「こまえ家族会 かめのよりみち」、主に小・中学生とその保護者を対象とした余暇活動である「こまえポケモンカード倶楽部」の活動を行っている。

セルフヘルプという力㊶

セルフヘルプグループとは、共通の悩み、問題を抱える人やその家族が自発的に活動を行う集まりのことです。このコーナーでは、セルフヘルプグループの思いや活動内容を紹介し、社会の認識を深めたり、他のグループの運営のヒントとなることをめざします。

追加記事はこちらから。

セルフヘルプという力

あなたの「はたらく」と「大切な人」を守るために

神奈川過労死等を考える家族の会

過労死等防止対策白書によると、令和7年度の労災支給決定件数は1299件、7年連続で過去最多を更新しています。働きかたの歪みによってひき起こされる、過労死[*1]。神奈川過労死等を考える家族の会（以下、家族の会）の代表 工藤祥子さんと安部宏美さんにお話をうかがいました。

安部宏美さんの経験

わたしの場合は、長男を過労死で亡くしました。2019年11月、当時30歳でした。入社して5年目、本社に移ったばかりで、新しい仕事を頑張ろうと意気込んでいた矢先に、息子は自ら命を絶ちました。

息子は大学院卒業後、システムエンジニアとして勤めていました。性格は温和で、活発なほうではありませんでしたが、大学に入ってからはサークルをかけもちし、就職後も飲み会に出かけるとか、わたしからみても交友関係が広がったなという印象でした。人を押しのけて頑張るといったところはないですが、まわりから信頼される感じではあったと思います。

わたしは夫と長野県に住んでいますので、神奈川県内で働く息子のアパートに泊まることがありました。帰りが遅い時があって「大丈夫なの？」と心配すると、ひとりじゃないからと答えていました。ちょうど、高橋まつりさんの電通の事件[*2]が起こり、盛んに報道されていた頃でもありました。亡くなる2か月前の9月、家族みんなで食事をした時も、忙しいけれど頑張ってるよという感じでした。あとでわかったことですが、会社で息子と同じプロジェクトにかかわっているみなさんも一様に休日出勤が続き、過重な労働を負わされていたんですね。



安部宏美さん

当時、息子は次男と一緒に住んでいました。大学院生だった次男にはそれほど話してはいなかったようですが、次男から「自分が寝た後、深夜遅くに帰って来ても朝は普通に出かけるから、眠れていないのではないか」と聞きました。息子には交際相手がいましたが、その方には職場の上司に相談してもなかなか改善しないと話していたようです。本当に仕事に追い詰められていったという感じです。そばにいた次男が一番つらかったかもしれません。

亡くなった時は、まさかと思いました。どうしたら良いのかわかりませんでしたが、仕事が原因で労災の対象だと思っていましたから弁護士には相談しました。けれども、もう辛くてしょうがなく、インターネットを通じて全国過労死を考える家族の会を知って、藁をもすがる思いで電話をしました。神奈川に勤めていたのならと神奈川の家族の会を紹介され、その後すぐに工藤さんがお電話をくださったのです。息子を亡くしてひと月半ぐらいの頃で、何も解決はしていなかったんですけど、会とつながることができて、とても救われました。

工藤祥子さんの経験

わたしは、中学校の教員だった夫を、2007年6月にくも膜下出血で亡くしました。当時40歳、わたしとは大学の同級生でした。体育の教員で、とにかく明るい性格で、お酒をあまり飲まない人でしたが、飲まなくても高いテンションでいられる、ほんとに元気な人でした。4月



家族の会総会のようす

神奈川過労死対策弁護団サイト

『パンフレット「知る」「聴く」「動く」の3ステップで学ぶ過労死』はこちらよりダウンロード

に新しい学校に赴任し、たぶん慣れない業務もあって忙しさが増していました。さらに修学旅行で2泊3日、不眠不休ではたらいて、その1週間後、起き上がれなくなるほど頭が痛くなり、病院に行き、その待合室で倒れてしまいました。

ふたりの娘は当時、中学生と小学生で、何が起こったのかわからなかったと思います。夫は倒れてから5日間、脳死状態で入院をしまして、わたしと子どもたちは病院に泊まっていました。お父さんの周りにいてあげようって。子どもたちはわからないながらも、お父さんって話しかけたり、でもなんでここにいるんだろうという感じでいたと思います。

子どもたちは思春期でもあり、亡くなる直前まで、夫が塾や習い事のお迎えをしてくれていましたので、それが急にいなくなってしまい、すごく混乱し、高校生になってから荒れた時期もありました。わたしは教員をしながら、すごく苦しいなかで子どもと接していた覚えがあります。（人は）つらい記憶を消して心のバランスを保つと聞きますけれども、今、子どもたちはその時のことを覚えていないと言っています。一番つらい時は覚えていないけれども、お父さんのことはとにかくいい思い出しかないと話してくれるのは、救いではあります。



工藤祥子さん

夫の同僚などからすすめられて、過労死認定の申請をしました。当時わたしは弁護士にお願いしなくても良いと思っていましたので、周りの方に手伝ってもらいました。子どもをお父さんがいるのと同じように育てたい、こんな悲しい思いをさせたくない、教員として仕事を全うしたという夫の尊厳を認めてあげたい、とにかく過労死を認めさせなきゃいけないと、その気持ちだけで前に進んでいましたね。

わたし自身、突然シングルマザーになってしまいました。でも、遺族としてのわたしの思いを聞いてくれる人は意外といないのです。のちに友だちには、聞いてあげたかったけれど、どうやって接したら良いのかわからなかったと言われましたが、わたしも同様でした。誰かに話したいけれど、どうやって話せば良いかわからずに自分で全部を抱えたまま、5年経ってしまった気がします。

結局、1回目の申請は不認定でした。当時、わたしは本当に忙しくて、とにかく精神的にいっぱいいっぱいになってしまい、疲労から倒れてしまいました。教員を続けるかを迷った時、夫が命を亡くし、わたしまでいなくなってしまったら、子どもはどうやって生きていくんだろうと考えて、教員の仕事を辞め、子どもを育てること、過労死認定を取ることに絞ろうと決めたんです。

その後、たまたまテレビで過労死110番[*3]を知って、すぐに電話をし、弁護士の先生についていただいて、2012年12月に夫の過労死が認定されました。

葛藤のなか、家族の会と出会う

安部：直後は、悲しみと会社への怒りでした。なんでこんなことになってしまったのか、これは防げたことではないのかと、気持ちはぐちゃぐちゃでした。そんな頃、工藤さんから家族の会の交流会に誘われて、横浜まで夫と一緒に出かけました。そこで、わたしたちと同じように若い息子さんを亡くされた人がほかにもいらっしゃると知って驚きました。

その頃は息子が亡くなってからふた月ほどで、労災の申請もひかえ、これからどうなるんだろうという気持ちでしたから。

でも、その時に会のみなさんと出会えて、とても心強かったですね。会には、家族を亡くしてから1年や2年が過ぎた方、労災の申請を終えた方、疲労で体調を崩す方などさまざまな方がいて、そうした経験や同じ思いを持つ方の言葉が力になりました。自分ひとりで悩んでひきこもっていたら、ここまでくるにはもっと時間がかかったかもしれません。会のみなさんに励まされ、支えられる過程を経て、今があります。啓発活動をやらないかと声をかけられた時、理不尽さへの怒りもちょっとあり、悔しさの反面、悲しみもあって、何かをしないと自分が潰れそう、そんな思いがあったかもしれません。

工藤：安部さんとはじめてお会いした時のことは、今でも覚えています。会に参加して最初の頃は、みなさん、だいたい消え入りそうなんです。それでも話すうちに、少しずつその方の言葉が聞こえてきて、あ、こんなことを言ってくれたとか、わたしたちと接してくださったとか、同じ体験をした方と連絡先を交換したとか、そうやって立ち直られていく姿はわたしにとっても励みになります。こんな経験をしてひきこもりそうになってしまうところを、こうやって生きているだけでもすばらしいと思っているんですが、なかにはだんだんと自分を取り戻して、会社にきちんと責任を取ってもらいたいと行動に移される方もいます。どんな形でも、前を向いて生きている姿をみると嬉しいと思いますし、だからこそ、こういうことはなくさなきゃいけない。強い気持ちになっていくのは事実です。

家族の会の活動

工藤：家族の会は現在、全国17ヶ所で活動しています。わたしたちの神奈川の家族の会は2017年に、わたしが弁護士の先生たちと一緒に立ち上げて今年で10年目になります。活動のひとつは分かち合い、もうひとつは過労死防止に向けた啓発に取り組んでいます。神奈川の家族の会の場合は、会員のほぼ全員が過労死の遺族で、なかには精神的な病いで働けなくなった方もいらっしゃいますが、それぞれ経緯の違いはあっても、大切な人を亡くしたという点では共通です。現在は2ヶ月に1回、交流会をハイブリッドで開催して2時間ほどみんなで自由に話せる場をつくっています。それから、弁護士の先生や労働団体のみなさんと集まって、年2回、悩みごとや法律などについてざっくばらんに話し合う会をひらいています。

啓発活動として、現在、わたしは厚生労働省の過労死等防止対策推進協議会委員をしています。家族の会は他団体と一緒に過労死等防止対策推進法[*4]の成立に取り組んできた経緯から、厚生労働省に委託されて、安部さんやわたしなどが大学や高校に出向いて弁護士の先生などと一緒に、過労死をなくすためのいろいろなお話をしています。

安部：仕事のために生きる生活になってしまっていると感じる人もいると思いますが、本当は自分の生活を充実させるために働いているはずです。生活を大切にしながら働くほうへ、みんなの意識が変わっていくといいなと思います。

工藤：そうですね。生きることを楽しむために働く、のですものね。会の活動に関心のある方は、全国過労死を考える家族の会のホームページをご覧ください。みなさんがお住まいの地域のグループがわかりますので、まずそこに連絡をするか、もしくは全国の相談窓口にメールで相談していただくと良いと思います。

*1 仕事における過労やストレスによって脳・心臓疾患、呼吸器疾患、精神疾患等を発病し、死に至ること。自死を含む。

*2 大手広告会社の新入社員で、過重労働により心身を病み、自殺に追い込まれた。

*3 過労死や過労自殺、ハラスメント等の労働問題に関する相談・支援組織。事務局は過労死弁護団全国連絡会議。

*4 2014年施行。

全国過労死を考える家族の会

長時間・過重労働により命を奪われた人びとの遺族が各地で「過労死を考える家族の会」を設立、1991年に「全国過労死を考える家族の会」が結成。

キーワード	過労死、過重な労働、過労死等家族
活動内容	交流会、啓発
相談	あり
連絡先	全国過労死を考える家族の会ホームページより各地の会の案内あり

全国過労死を考える家族の会

大学・短大等における学生ボランティア活動支援連絡会２０２６を開催

今年のテーマは「学生のニーズから考えるプログラムづくり」。12月６日に開催します。ボランティア団体のリーダーとして活動している学生、大学・短大等ボランティアセンターの運営にかかわる学生スタッフほか、教職員やボランティア活動推進機関の関係者の皆さんのご参加お待ちしています！

大学におけるボランティア活動支援に関する全国実態調査報告書 発行！

全国の４年制大学・短期大学におけるボランティア活動支援組織の設置及び運営の実態を知ることを目的として行った全国調査の報告書がまとまりました。ボランティアセンターなど「ボランティア活動を主たる業務として担当する部署がある」大学等と学生課など「他業務とともに、ボランティア活動を担当する部署がある」大学等の回答のクロス集計結果を掲載。ＮＰＯ法人教育ソリューション協会が提供している「全国学校データ大学・短期大学」１１０６校を調査対象として、各校に調査票を配布しました。

自由記述で寄せられた課題を踏まえ、追加ヒアリングを実施し、報告書を作成しました。報告書および速報版は下記よりダウンロードください。



市民社会をつくるボランタリーフォーラムＴＯＫＹＯ２０２７

暮らしに関わる社会問題に焦点をあて、私たち市民にできることを考えるイベントを２０２７年２月６日（土）～７日（日）に開催します。この催しは２００４年にスタートし、毎年多くの人にご参加いただいています。今年の全体テーマは、フォーラムへの参加をきっかけに、市民社会をつくる新たな一歩が生まれることを願って「見つけよう 私のボラリス～Liveに！ Realに！ Borderlessに！～」としました。

プログラムや参加のご案内等については、12月以降、順次、特設サイトに掲載していきます。ぜひチェックしてみてください。

「ゆめ応援ファンド」募集開始！

ゆめ応援ファンド（ボランティア・市民活動支援総合基金）は、市民社会の創造をめざすため、都内の地域住民や住民団体の活動に対して助成を行う基金です。助成対象は①ボランティア・市民活動団体、②ボランティア・市民活動を推進している民間非営利団体。申請受付は11月１日～１月５日です。

もしもボランティア活動中にケガをしたら…ケガをさせたり、物を壊したら…

※ボランティア保険および行事保険の加入は、東京都内の各区市町村のボランティアセンターまたは東京都社会福祉協議会窓口で手続きができます。





東京都社会福祉協議会指定生損保代理店
有限会社 東京福祉企画

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1-2
研究社英語センタービル ３階

TEL. 03-3268-0910
FAX. 03-3268-8832

東京ボランティア・市民活動センターをご利用ください！

東京ボランティア・市民活動センター(TVAC)は、「ボランティアをしたい」「ボランティアについて調べてみたい」と思うみなさんのためのオープンスペース。個人に、団体に、さまざまなサービスを行っています。
どうぞご利用ください。



ボランティア募集やイベント・講座の情報はここで！

いろいろな団体から届いたチラシやパンフレットなどを集めてラックに配架しています。
また、各団体のニュースレター(最新号およびバックナンバー)を見ていただくこともできます。

ボランティアの相談ができます

ボランティア活動に関するさまざまな相談をお受けしています。
(予約不要・無料)

フリースペースを利用できます

大小さまざまのテーブルを自由にご利用ください。Wi-Fiも使えます。



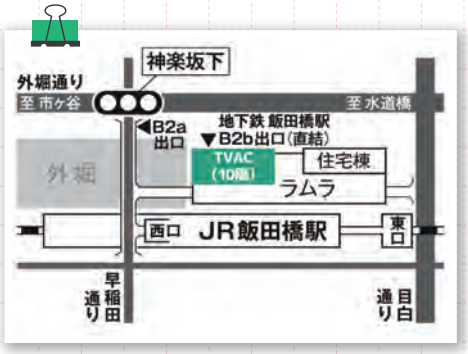
ふれあい満点市場

福祉作業所やNPO・NGOによる手づくりの布製品、Tシャツなど、さまざまな製品を販売。当センターオリジナルグッズ「ぼらせん」も販売中！



「ボランティア保険」に加入できます

ボランティア活動中の事故などを補償する保険への加入手続きができます。



東京ボランティア・市民活動センター
https://www.tvac.or.jp
運営主体：社会福祉法人 東京都社会福祉協議会
飯田橋駅すぐ(JR西口徒歩１分 / 地下鉄B２b出口直結)
OPEN：火曜～土曜 9:00～21:00 / 日曜 9:00～17:00
(祝祭日・年末年始を除く)
03-3235-1171／FAX:03-3235-0050
〒162-0823 東京都新宿区神楽河岸１-１
飯田橋セントラルプラザ10F

● ご活用ください。 ●

本誌のバックナンバー

本誌のご意見・ご感想

ボランティアの魅力発見誌 ネットワーク

「ボランティアをやってみたい」「自分にも何かできることはないかな？」そんな思いをもつ人たちに、「はじめの一歩」のきっかけを届けられるような情報誌を目指します。

編集委員：
江尻京子(NPO法人 東京・多摩リサイクル市民連邦)
片岡紀子(NPO法人 患者スピーカーバンク)
小池良実(岡さんのいえTOMO)
小林涼帆(明治大学学生)
小淵康博(西武信用金庫 地域協創部)
野村美奈(社会福祉法人武蔵野会 リアン文京)

編集後記

特集の記事を書くにあたり、さまざまな立場の方から話を聞いた。総合的な学習・探究の時間は教科書がなく自由だからこそ、福祉を取り上げてもらえるとは限らない。しかし、これからの未来を一緒に作る児童生徒に知ってほしい声がたくさんある。その時代に合わせた福祉教育や市民学習が発展していく方法を皆で考えていきたい。(えの)

発行人：山巻 毅／編集：東京ボランティア・市民活動センター(nw@tvac.or.jp)
デザイン：東京ボランティア・市民活動センター、島津印刷㈱／表紙イラスト：Kaoru Takabayashi／印刷：島津印刷㈱
2026年11月20日発行(通巻404号)／ISBN 978-4-909393-72-2 C2036／定価400円(本体364円+税10%)
本誌掲載記事の無断複製・転載を禁じます。

＊本誌で使用しているQRコードは、㈱デンソーウェーブの登録商標です。

Vol. 62

いいもの みぃ〜つけた！

ワークショップ石神井の植物をテーマにしたアイテム

このコーナーでは、ボランティア・市民活動・福祉施設のグッズや作品を紹介します。



贈り物や自宅の装飾用などとして、年代を問わず人気がある製品の数々。区の販売会や事務所併設ショップで購入できる。ドライフラワーオブジェ800円〜、ハーバリウム1,200円〜、リース1,000円〜。







ハーバリウムボールペン800円(上)。お話を伺った、左より大越さん・島田さん・高橋さん。

窮地から誕生した人気のグッズたち

2020年―新型コロナウイルスが世界を席巻し、私たちの日常に大きな影響を及ぼしました。おもに精神障がいのある方々が働く、ワークショップ石神井でも一時、仕事の場が提供できなくなりました。

そんなとき、一人のスタッフが毛糸のリース製作を発案。芯材づくりや、芯に毛糸を巻き付ける在宅作業をしてもらうことができました。皆で試行錯誤しながら独学で創作し、これを皮切りに、たった１年余りで松ぼっくりのリースやドライフラワー、ハーバリウムづくりへと発展したそうです。

木の実などを拾い、煮沸消毒やニス塗りをし、容器に入れたり飾ったりと、多くの人が分業で関わることを大切にしています。製品が購入されることで、働く人たちのやる気や自信につながっているとのこと。「自分自身がこの製品のファン」と語るスタッフの方々。新製品も企画中なのだとか。乞うご期待！

ワークショップ石神井

場所 〒177-0041
東京都練馬区石神井町7-17-4
TEL 03-5923-9811
FAX 03-5923-9812

Instagram



ボランティア魅力発見誌
ネットワーク
2026年11月20日発行　2026年11月号　通巻404号　発行人　山巻　毅　〒162-0823　東京都新宿区神楽河岸1-1　東京ボランティア・市民活動センター
定価400円（本体364円＋税10%）

2027年度

公益財団法人 ホース未来福祉財団 助成金・奨学金 募集案内

私たちはこれまで、「障害者福祉助成金の贈呈」や「奨学金の支給」を通じ、多くの団体や学生の皆様を支援してまいりました。「共に生きる社会を目指して努力されている方々を応援すること」、そして「身体的、経済的な困難を抱えながらも夢を追いかけ、学ぶことに喜びを感じている学生の皆様を支えること」。これらは、未来をより明るくするために欠かせない大切な取り組みだと、私たちは信じています。
代表理事が障害のある長男を育てる中で、多くの方々の温かいご理解やご支援に支えられてきました。
彼が自立し、社会の中で活躍できるよう願いながら歩んできた日々は、今のわたしたちの活動の大きな原動力となっています。
今も、様々な状況に直面しながらも、未来に向かって努力を続けている方々がいます。私たちは、そうした方々に寄り添い、少しでも力になりたいと願っています。ただ支援を届けるだけでなく、目標を分かち合い、共に支え合える「つながり」を生む場を作りたい――そう強く思っています。

障害者福祉助成金募集概要

1. 募集内容

⑴ 助成総額5,000千円を予定　1件当たり最大400千円
⑵ 助成対象事業・活動
① 障害者の自立及び社会参加に関する活動
② 障害者による又は障害者を対象とする文化事業（スポーツ・研究・出版等）
③ 障害者を対象とするボランティア活動

2. 募集期間　現在募集中

2026年10月1日(木)～2027年1月31日(日)
（当日消印有効）

3. 選考結果の通知

2027年5月開催予定の選考委員会で決定し、理事会承認後文書にて通知予定

4. その他

応募要件、応募方法については下記のホームページをご確認ください



◀2026年度贈呈式の様子

奨学金募集概要

1. 募集概要

東京都所在の大学・専門学校に在学する障害者及び経済的理由で就学困難な者に対し奨学金支給（返済不要）及び指導・助言を行う

2. 募集期間

募集期間は2027年3月中旬から4月末を予定。支給額等詳細は追ってホームページに掲載致します。

提出・問合せ先

公益財団法人
ホース未来福祉財団　事務局宛

〒145－0066　東京都大田区南雪谷2－17－8
TEL　03－3720－5800
(携帯)　080－9055－7869
FAX　03－4496－4948
mail　info@horse-fw.or.jp

https://horse-fw.or.jp

ホース未来福祉財団　検索

ISBN 978-4-909393-72-2　C2036　¥364E